
灰色少女

南雲 アリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色少女

【Nコード】

N2174Z

【作者名】

南雲 アリス

【あらすじ】

村はずれの森に住んでいるエリアナ（主人公）は灰色の瞳と髪を持つせいで村の皆から嫌われている可愛そうな女の子。ある日嫉妬した村長の娘フィアカに勝手にお城に売り飛ばされて…。村娘からお姫様へ！？

シンデレラストーリーを目指してみました。暇でしたら読んでみてください。

他サイトと重複投稿です。

プロローグ

私は、エリアナ・ウエルム。どこの村や町にいつても嫌われる。まあその事はそれなりに事情があるから仕方がない。私が嫌われる理由は2つある。

1つ目は、私の髪の色と瞳の色が灰色だからだ。この国には、髪の色は金髪や茶色といった色が多い。瞳の色は皆深い緑色だ。だから私はこの国の人間みんなから嫌われる。

2つ目は、私は動物や木と話せることができる。猛獣から小さい可愛い動物。私の身の回りにはたくさん動物がいる。だからみんなは、動物と話せることができる私を怖がっている。

だから私は親にも捨てられたのだろう。灰色の瞳と髪。動物と話せる。今まで仲良くしていた人も動物と話せると言ったら気味悪がって私の元を去っていった。

でも私にも仲良くしてくれる人は一人はいる。そのひとは、エドガー。アザック私の小さい頃からの幼馴染みだ。一緒に洞窟を探検したり薬草を探してくれたりした。私の兄弟みたいな人。

「エリー。イノシシ捕まえたからエリーの特製シチューを作って〜」
「いいわよ。エドガーは下準備をしてきて。」

彼は一週間に3、4度くらい肉を分けてくれる。ちなみにエリーとは私の愛称だ。私は愛称で呼ばれるくらいの親しい人が居ないからとても嬉しい。

「エドガー。ここにくる事をなにか言われなかった？」

彼は容姿端麗で性格もよくて村人全員に好かれているから私のところにくると彼の評判が下がってしまう。

「村長とフィアカに『あんな呪われた娘のところに行くなっ！』って言われた」

多分村長の娘のフィアカはエドガーが好きで、村長はあわよくばフィアカとエドガーを結婚させるつもりだ。エドガーは、こんなところにいるよりもフィアカと結婚した方がましだろう。

「エドガー。ここにくるのが嫌なら来なくてもいいのよ」

ここに来ないのもエドガーのためだ。でも本当にエドガーが私のこと好きだったらエドガーは傷つく。そしてこんなに優しくしてくれた人を裏切って傷つく権利はないと思うけれど私も傷つく。

「嫌いなんかじゃない！」

彼が怒鳴った。エドガーが私に怒鳴るときは決まって私がネガティブな事を考えて言葉に出したときだ。もう、こんなやり取りを何回も繰り返してきた。

「……ごめんなさい…。私、貴方に迷惑をかけていると思うと…。」
「ごめんな。俺も怒鳴って。」

そしていつも私達がお互いに謝ったあとタイミング良くあいつが来る。ドアが開いた。

「あらゝあなた達また喧嘩をしたの？まあ悪いのはその薄汚い女だと思っけれど？」

「フィアカ……。」

またこいつだ。いつも私達が喧嘩した後にタイミング良く現れる。こいつはエドガーをストーカーしているんじゃないのか。村人達に美人だとおだてられ育って世の中を知らずに気取った性格になって育った。彼女はフィアカ「アルガン村長の娘。私の宿敵。」

「エドガー様。こんな女と遊ばずに私と遊びましょう。」

「俺これからエリーにシチュー作って貰うからムリ。」

「そんなんっ！シチューを作ってもらうなんて！毒が入っていたらどうするんですか！」

失礼な女だ。私は何回もエドガーに料理を振る舞ったりした。もし私がエドガーに振る舞った料理に毒を入れようとしても私には毒を
買うお金がない。

「おい！フィアカ失礼だぞ！謝れ！」

「何ですか？私はエドガー様の身を案じて！」

「フィアカさん出て行って下さい」

私がフィアカを追い出そうと腕をつかもうとしたとき。

パシッ！

「何を！汚れるからさわるでない！」

フィアカに頬をビンタされた。私が啞然としているとエドガーが怒
鳴った。

「フィアカ！この家から出ていけ！二度と来るな！」

フィアカの顔がどんどんと泣き顔になっていく。いい気味。フィ
アカはエドガーが好きだから余計悔しいだろう。でもどうせこの後

私は呼び出されたいじめられる。

「ひどいですわあああ！お父様に言いつけてやります〜！」

「悪いのはそちらですから」

フィアカはドアに向かってドスドスと歩きだしたと思っていたらフィアカが振り返って私に聞こえるくらい小さな声で言った。

「西の廃墟にて待ちますわ。三時に来なさい」

「わかりました」

私もフィアカに聞こえるくらい小さな声で返事をする。

ボタン

ドアが閉まると同時に私は床にへナへナと座りこんだ。エドガーが心配して駆け寄ってくる。頬から血が出ている。フィアカがビンタすると見せかけて爪を立てて引っ掻いたのだろう。

「エリー！大丈夫か?!」

座りこんで泣きじゃくる私をエドガーは私が泣き止むまで優しく抱

き締めてくれた。

*
*
*
*
*

ブログ（後書き）

初投稿です。

誤植とかあったら教えて下さい！

よろしく願います。

プロローグ2

* * * * *

フィアカと約束をした3時が来た。

「エドガー、私動物達に餌をあげにいくな。5時くらいには帰ってくるから。」

「じゃあ俺もついてくよ」

いつも私はフィアカに呼ばれたときはエドガーに嘘をつく。本当のことをいったらエドガーはきっとフィアカを殴りに行きそうだから。あれでもフィアカは女の子だから顔に傷痕が残ったら可愛そうだ。

「ごめんね。最近森にハンターが出入りしているから動物達が警戒しているの。」

「じゃあしょうがないな。行ってらっしゃい」

最近はお私が出掛けるときにエドガーはいつも私の家にいる。自分で言うのもなんだけど私達が時々夫婦みたいに思える。はっきりいってとても恥ずかしい。

「行ってきます」

西の廃墟は村の近くにある森を五分くらい歩いていくとある。元は二階建ての家でその昔村人の集会で使われてたか……。でも今は、幽霊が出ると噂になっている。

「遅いわよ」

そこにはいつも私をいじめる人達がいた。でも今日はやけに人数が多い。

「兵士様。こちらが城のメイドになりたいと言うエリアナ・ウエルムです」

「なっ！フィアカさん！なんなのこの人達！」

「いいわよ。最後に教えてあげる。」

フィアカは珍しく勿体ぶらずに教えてくれた。まずはこの人達が城の兵士だと言うこと、そして今城ではメイド不足であること。フィアカが適任した人物がいると兵士達にしゃべったこと。

「兵士様達わね、この際異形のメイドでも良いですって。よかったわね働き口が見つかって」

「さあ。エリアナ・ウエルム行きますよ」

フィアカは本気だ。自分の都合のいいように自分が確実にエドガーをてに入れるように。この女狂ってる。

「いやっ！放してっ！」

私は兵士達に腕を捕まれ引きずられる。エドガー助けて！心の中で祈っても彼は来ない。私が余りにも暴れるから兵士達は私の鳩尾を殴り私の意識はそこで途絶えた。

*
*
*
*
*

プロローグ2(後書き)

うわぁい

すごく短い！

貴族のメイド

目を開けるとそこは、私の知らない場所だった。薄汚い屋根裏部屋
みたいなところ。

「起きた？。早速仕事をするからこの服に着替えて」

起きた私の目の前にいた人は、明るい茶色の髪で深い緑色の瞳。私
とは大違いな綺麗な人。

「早く起きて着替えて」

「はっはい！」

私はベッドから降りててきばきと着替える。この人美人だけど性格
悪いかも。それにしてもこのメイド服すごくひらひらしている。丈
は膝上15?くらい。いつもお尻を押さえて歩かないと下着が見え
そうなメイド服。貴族の坊っちゃんにさわられそうな気がする。

「このメイド服可愛いけどたまに貴族の坊っちゃんに尻さわられ
るから気を付けて」

えっ！貴女私の心を読んだのって聞きたいところだけど私は……

「貴女もここに無理やり連れてこられたんでしょう？」
「えっ！何で分かるの！それに貴女もって……」

彼女は本当にエスパーではないのかと私は疑い始めた。彼女も村の人達に売られたのではないか？

「そんな浮かない顔をしていれば誰でもきずくわよ。」
「私、そんな顔していましたか？」

彼女は面倒くさそうに大きく頷いた。それから少しずつしゃべっているうちに私と彼女と以外と仲良くなった。

「私の名前はアリファーナⅡヴァレンチノ。みんなからはファーナって呼ばれているわ」
「よろしくお願ひしますファーナさん。私の名前はエリアナⅡウエルムです。エリーって読んでください」
「ファーナさんって呼ばないでファーナって呼んで」

ファーナさんは不服そうに眉をしかめて私に言った。

「は…はいファーナ」

ファーナは私にお辞儀の仕方、掃除の仕方城での過ごし方を全て教えてくれた。そして彼女は自分の身の上話までしてくれたのだ。彼女は位の高い貴族の娘だったこと、父親がお金を持って愛人の家に行ってしまうって長女の自分が働かなきゃいけないこと全部話してくれた。

「……ずび…ひつく……」

「こんなことで泣かないでよ」

「だって…ファーナが可愛そう……」

ファーナは私とは全然違う綺麗な人。こんな綺麗な人なのにすごく辛い過去があったなんて信じられない……。

「私より貴女の方が辛い目に会ってるんじゃない？」

この人は最初から私の過去をお見通しのように話しかけてくる。でも今までこんな灰色の私に自分から喋りかけてくる人はエドガーしかいなくて嬉しいからファーナには、何でも話してしまう。

「確かに私はこの髪と瞳のせいでいじめられてきました。でもこの髪と瞳がなっかたらこんな優しい貴女に会えなかった」

ファーナは急に顔を赤くして恥ずかしそうに小さな声でバカと呟い

た。私がどうしてそんなに顔を赤くするのっていったら、ファーナは更に赤くなってあんた天然って言われた。

「そろそろ行かないとメイド長に怒られるわよ」
「はいっ！」

私とファーナは急ぎ足でメイド長のところへ向かった。

*
*
*
*
*
*

メイド長と「」対面

* * * * *

私とファーナはいかにもメイド長の部屋と主張していそうな扉の前に立った。ファーナは面倒くさそうに、ノックした。

「エリアナ＝ウェルムを連れてきました」

一拍した後に入りなさいとメイド長の声が出た。声からするとあまり歳を取ってないように聞こえる。ファーナが重そうな扉を開ける。

私とファーナは、メイド長に言われてメイド長の向かいの椅子に座った。メイド長は綺麗だ。思わずうつとり見とれてしまうほど綺麗な金髪と少しつり上がった薄い緑色の瞳。なんとなくファーナに似ている。

「私の顔に何かついてる？」

「いいえ！とても綺麗だったのでつい見とれてしまって……」

「まあ、正直なこと」

彼女は私の言ったことに気を良くしたのか部屋に控えているメイドにお茶とお菓子を持ってこさせて私に前においてどんどん食べなさいと言ってくれた。

「フィーナ、私のエリーを誘惑しないで」

「えっ！ちよつとフィーナ！メイド長さんにそんな口聞いていいの！？」

「そうよフィーナ年上には敬意をいつも払いなさいといっているでしょう」

フィーナとメイド長さんは仲良くではないが、昔から知っている知り合いのように話している。この人達はどつう関係なのだろうかと思っていたら、メイド長さんが私の気持ちを察したように、疑問に答えてくれた。

「私達は、従姉妹なのよ」

「真似しないでくれる」

「ほんとだ、従姉妹だ……」

「そこで納得しないでちょうだい」

彼女達は従姉妹より姉妹のような感じがする。それはたぶん、少しつり上がった目がとても似ているからだろう。

「早速本題に入りましょうか。まず私の名前はアリフィーナ＝ヴァレンチノよ。フィーナって呼んでちょうだい」

「えっ……でも……」

「これはメイド長命令よ」

「……はい。フィーナさん。では、私のことはエリーって呼んでください」

「わかったわ」

彼女は不服そうに眉をしかめた。こんな動作もフィーナにそっくりだ。

「まず、貴女達には、バラ園辺りの掃除をしてもらおうわ。フィーナは知ってると思いますが今日はリゲル国王の息子、ヴィンガウディ王子の誕生パーティーなので張り切って掃除をしてください。わかりましたね？」

「はいはい、わかりました」

「はい、私精一杯頑張ります！」

私が城に来て当日にこんな大切な行事があったなんて思いもよらなかった。王子の素敵な誕生パーティーになるように頑張らなきゃ。

「じゃあエリー行きましょ」

「行こう、フィーナ！」

私達は、廊下を競争しながら玄関までいった。

そのあと、メイド長に怒られたのは、言うまでもない。

変態騎士登場！！

『エリーは庭でバラ園の掃除をしなさい』

この言葉はメイド長が言ってくれた言葉だ。私の村での仕事は、夏は日向のところでは農作業が草むしり。冬は冷たい水で洗濯。それが私の日常だ。ファーナにフィーナさんは優しいねと言ったら、「あんただんだけ辛い人生送ってきたのよ」と言われた。

そういえばフィーナさん、私の外見に対して驚きもしなかったし、何も言わなかった。お城は優しい人ばかりなんだと私はほうきとちりとりを準備しながら思った。

「え〜と。たしかバラ園ってここら辺よね？」

私はファーナに書いてもらった地図を見ながらバラ園を探す。このお城は広すぎる。迷路みたいだ。

「このお城広すぎるわよ〜」

私が我慢がならずもうその辺の人に聞こうかと思ったそのとき

ガサガサ

「なっ何！」

ガサガサ

私の近くにある草むらが揺れている。動物か何かがいるのかもしれない。

「動物かな…？」

私が草むらに手を伸ばしたそのとき…

「きゃあ！」

草むらから何かが飛び出してきた。飛び出してきたものの正体は、騎士の格好をした青年だった。その青年は、茶髪で深い緑色の瞳だった。私がこの人ちよつとカツコイイかもと思ったとき。胸に何かが触っている感触がある。私がゆっくりと胸を見ると…

「君…見た目よりけっこうあるね」

「何が！」

いやな予感がするが一応何かか聞いておく。

「胸が」

ドガッ

私は、エドガーに教わった回し蹴りを無意識にやってしまった。
エドガーは村の人たちにいじめられている私に護身術を教えてくださいな（無理やり）。でも一応この青年が心配だ。だってこの人蹲って倒れてしまったんだもの！

「大丈夫ですか!？」

私の心配を無視して彼はまったく痛くなさそうに起き上がった。ういった。

「下着は白色だね」

ドガッ

今度は本気で殴ってしまった。

変態騎士登場！！（後書き）

うわぁ〜

変態すぎるWWW

ちなみに彼の名前は次回出てくると思います。

変態騎士登場！！2

「どうしたの！エリー！」

私の悲鳴にフアーナがいち早く気づいてくれて私のそばへ来てくれた。

「この人に…胸…触られた」

「なっ…なんですって!？」

フアーナは私から事情を聞いて私のためにこの青年を叱ろうとした。でもフアーナはこの青年の顔を見たとき…

「すつすみません！私の馬鹿な同僚が貴方様を殴ってしまって…」

「フアーナ？」

「あなたも謝りなさい！」

フアーナは突然頭を深くこれでもかというくらい下げた。どうしてなんだろう？この変態がそこまでえらい人なのかな？

「どうぞお許し下さい竜騎士様」

「竜騎士!？」

「いいよそれくらい全く痛くないから」

この人が竜騎士!？竜騎士とは、この世界に伝わる伝説の話の人物。魔界にいるというドラゴンを自分の力で倒したらなれるという伝説の勇者だ。いままで何人もの人が竜騎士になろうとしたがみんな圧倒的に強いドラゴンの前では無力で死んでいったとゆう伝説が…本当に竜騎士なんていたんだ…。

「じつごめんなさい！あなたのこと竜騎士様なんてしらなくて…」
「いいよ。その代わりこんどまた胸さわらして。それにしてもその髪…」

「じつごめんなさい…目障りですよね…」

「いいや。とつても綺麗な銀髪だ」

「ぎん……ぱい……？」

私は今までこの髪の色のごとは、ねずみ色や、灰色とかしか呼ばれたことが無い。いまさら銀髪なんて呼ばれてなんだかはずかしくかんじる。

「瞳も銀色。やっぱこんどはその髪を触らせてよ。」

「…え」

「これは竜騎士としての命令」

「う…はい…」

こんなかつこいい人にこんなこと言われるのは、初めてだ。

「俺はルークアーク…ナイトレイ。君の名前は？」

「エリアナ…ウエルムです」

「じゃあヨロシクなエリー」

「はい！ルークアーク様！」

「俺のことはルークって呼んでくれ。いいな」

「はい。る…ルーク」

人に自分から愛称を教えなくて呼ばれてもらうのなんて夢にも思わなかった。私はずっと一人ぼっちだったから。一人じゃなくなつた気分。

「いいこと教えてあげるよ」

「いいこと?」

「とっつてもいいこと」

「何ですか?」

「この国の初代王の髪と瞳の色はね銀髪だったんだよ」

「そんながいいこと?」

私はそんなことがいいことだとは思わない。

「君にとっつても重要なことだよ。じゃあまた今度ね」

「本当にそれがいいことなのかしら?」

変態騎士登場！！2（後書き）

ファーナは二人が良い感じだったので気をきかせてどうか行きました。

番外編 とある騎士の憂鬱 1 (前書き)

この話はルーク視点です。

エリーとルークは昔会っていた！みたいな…？

設定上この話の中ではルークが13歳エリーが8歳です。

番外編 とある騎士の憂鬱 1

十年前

「はあはあ……」

俺は父親（将軍）が嫌いだった。

いつも朝5時に起こされて無理やり山の中を「訓練だ！」と言われて走らされる。今の季節は冬だから手が凍るくらい寒い。

（もうこんな生活慣れたけど……）

今まで何度も親父から逃げ出そうとしたけど、まだ子供の俺は足が遅くて毎回捕まる。でも今日は親父が朝から居ない。城に王子の剣の稽古をつけに行ったからだ。逃げるチャンスは今しかない。幸いこの森には人は居ないだろう。誰かに見つかる心配もない。

（もっと森の奥まで、誰にも見つからない所まで行こう）

そう思った瞬間、

ガサガサ

茂みが揺れた。

「誰だ！出て来い！」

俺はその正体は、俺に仕向けられた暗殺者が動物かと思っていたけれど、違った。

「お兄ちゃん…そこで何をやっているの…?」
「子供?」

茂みから出てきたのは、8歳くらいの灰色の髪と瞳を持った子供だった。その子供は少しおびえた様子で少し震えている。

「なんで子供がここにいるんだ」

「あのね…私のお家はこの近くの…」

こんな村はずれの森に?そんな馬鹿な…

「私ね、村の人みんなにいじめられるの…。だからおばあちゃんと一緒にこの森に引越してきたの」

「なんだ。おばあちゃんも居るのか」

この子は髪と瞳の色のせいでいじめられてる。このことは俺にも予想はできる。よくみると少女の頬には青黒いアザが出来ていた。少し心配だ。この瞬間俺ははっとした。何故この子供のことを心配しているのだろうか。

「おにいちゃん、私の外見のことで何も言わないんだね…」

「ああ、ごく稀に居るだろう人とちよつと変った人間って」

この少女は今ニコツと笑っている。さっきまで俺に恐怖を抱いてる表情しかなかったのに、俺のさっきの言葉で笑った。

「じゃあ、お兄ちゃんは特別に私のお家に招待してあげる!」

「いいよ、別に招待しなくても」

俺ははやくこの場から立ち去らないといけない。そんな予感がする。

「いいから来て！エリーの特性シチュー作ってあげる！」

「特性シチュー？」

「うん！私シチュー作るの得意なんだよ！」

なんだかこの少女が可愛く思えてきた。と、そういえばこいつの名前きいてなかったな。

「俺はルークアーク。君の名前は？」

「私はエリアナ！エリーって呼んで！」

俺が自己紹介をした後エリーは考えるように顔をしかめた。

「じゃあ、お兄ちゃんの愛称はルークだね！」

「愛称？」

「そう、愛称。おばあちゃんが教えてくれたの。親しい人とは愛称で呼ぶんだよって」

この子は俺の嬉しいがことを最初からお見通しみたいにはずばずと当ててくる。うちには愛情がこもった料理なんて作ってくれないし、名前も愛称で呼んでくれる人なんて居ないから…

「それじゃあエリーはやく君の家に行こう」

「うん！ルークお兄ちゃん。私の家はこっちだよ」

俺達が歩き出したころ雪が降り始めて寒かった。けれどもエリーとつないでる手だけはとても暖かった。

番外編 とある騎士の憂鬱 1 (後書き)

ルークこの頃は性格捻じ曲がってないね…？

番外編まだまだ続くよ！

番外編 とある騎士の憂鬱 2 (前書き)

今回は流血表現アリなのでグロテスクがきらいな人は見るのを控えて下さい。

少し長めです。

番外編 とある騎士の憂鬱2

エリーの家に来て一時間くらいたった。

「ルークお兄ちゃん！シチューできたよ！」

あいにく、エリーのおばあさんは居なかった。エリーが言うには、こんなさ寒い中3、4?くらい離れた街に食料を買いに行ったとか…。

「おいしそうだな……うまっ！」

これが家庭の味と言う物だろうか。エリーは下手をするとうちの料理人より料理が上手かも知れない。

「いつつもね、おばあちゃんが褒めてくれるの。エリーのお料理は上手ね」って

エリーは、嬉しそうなのに何故か悲しそうに微笑んだ。

「そうだ！エリーにいい物上げよう」

「いいもの!？」

エリーは突然目をキラキラ輝かせ、期待するような目で俺を見て

きた。

「そんなに期待するなよ……」

「だっていい物なんでしょ？」

「う……まあそうなんだけど……」

俺が言ういい物とは、俺の家の掟みたいな物で代々親から子へ受け継がれるネックレス。それを自分が愛した人に贈る。婚約指輪みたいな物だ。

「いいかエリー。このネックレスをつけなくてもいいから、いつも肌身離さずもっていてくれ。このネックレスは俺が必ずお前を迎えに行く。そういう目印みたいな物だ」

「迎えに行く……？」

「そう。将来お前と俺はずっと一緒に居られるようになる。お前と一緒に居たくないと言っても俺はエリーを離さないから……」

なっ……何俺子供相手に将来の結婚の約束をしてるんだ！馬鹿じゃねーの！……でもエリーがたまらなく愛しいと思うのには違いは無い。でもこれで誰かにエリーを取られる心配は無い。

「ずっと一緒……。エリーと『家族』になつてくれるの？」

「ああ。エリーが嫌だつて言っても強制的にお前を俺の『家族』にしてやる」

俺達がシチューを食べ終わる頃。外からたくさん足の音が聞こえてきた。その足音はどんどんこちらへ向かってくる。だんだん足音が聞こえてきてはつきりと聞こえるくらいになった。そしたらエリィがピクッと反応して、怖がるようにしてドアから遠ざかるように俺の後ろに隠れた。

「どうしたんだ？」

「あいつらがきたの」

「あいつら？」

俺が聞き返したとたん、ドアが勢いよく開いた。

「野郎共！金になりそうな物全て見つけて来い！」

「了解！！！！」

盗賊と思われるやつらがエリィの家に侵入してきた。

「お前らなんなんだ！この家から出て行け！」

盗賊の頭と思われるやつがこちらに向かってきた。

「ガキは引っ込んでろ！」

俺は殴られて倒れこんだ。

「ルークお兄ちゃん！！」

せめて武器さえあれば少しは抵抗できるはず……どこかに武器は……

これは頭の子分の血。違う。

これはエリーの赤い血。そうだ。

エリーの首元から出てる赤い血。

お兄ちゃんと今にも消えそうな声で俺を呼んでいるエリー。

「おにい……ちゃん……にげ……て……」

「エリー……！」

エリーは静かに目を閉じた。

番外編 とある騎士の憂鬱2 (後書き)

ここでエリーが死んだらこの話成り立たないよね。
（ある意味ネ
タバレ）

番外編 とある騎士の憂鬱 3 (前書き)

R15 少し入っています

番外編 とある騎士の憂鬱3

俺はエリーが倒れたときから記憶が無い。けれど俺の周りには、血まみれになった盗賊達が死んでいた。俺の右手には血まみれになったナイフが握られていた。

「俺が…やったのか…」

エリーは机の下で倒れている。俺は急いでエリーのそばに駆け寄った。

「エリー！」

エリーの灰色の髪は自分の真つ赤な血で染まっていた。こう見るとエリーの髪は灰色ではなくて、銀髪に見える。俺は急いでエリーの脈をはかった。俺はほっとした。

「まだ…生きてる…」

俺は無力だ。子供一人も守れない。俺はここには必要ない。エリーの手当てをしたらここを出て行こう。

「エリー…俺は強くなって絶対にお前を迎えに来るから…」

彼女が少し微笑んだような気がした。

エリーの手当てをしていたら夕方になった。今彼女はすやすや寝ている、けれど、ときどき苦しそうに俺の名前を呼ぶ。その姿がすごく愛おしくて、可愛くて、抱きしめたくなった。けど、抱きしめるとエリーの傷が開きそうなのでやめた。その代わり俺はエリーにキスをした。一生忘れられないようなキスを…。

「……………んう……………」

エリーが苦しそうにする。こんな声も愛おしい。

「じゃあ、エリー10年後に会おう……………」

俺は振り返ることも無くこの家から去った。

<ルークの家>

「ルークアーク！今までどこに行っていたんだ！……どうしたんだ？その血は！」

血まみれの俺に驚いたらしいおれの父親が俺に聞いてくる。俺は全てのことを話した、けれどネックレスとキスのことは言わなかった。

「それで…お前はどうしたいんだ…？」
「俺は…」

もう二度と好きな人が傷つくところは見たくない。エリーの傷つくところは見たくない。

「俺は強くなる…だから親父…いや、お父さん。俺を鍛えてくれ俺を強くしてくれ」

「ルークアークそれは違う。俺に鍛えてもらうんじゃない自分で自分を鍛えるんだ」

「自分で自分を…？」
「そうだ」

お前は自分が強くなることだけを考えろそういつ事なのだろうか。

「俺は強くなる…そして…」

現在

「このお城広すぎるわよぉ」

俺はこの時、見習い騎士の鍛錬に付き合っつのをサボっていつもの昼寝場所である木の下で寝ていた。そしたら足音が聞こえてきた。それと同時に声も…。懐かしい声…。愛しい人の声…。

「エリー？」

俺は急いで起き上がって、気づかれない様にそっと茂みからのぞく…

見つけた

俺の最も好きな人

俺の最も愛する人

エリーはもう俺のことなんて忘れているだろう。エリーは成長し

た、特に胸とか…灰色の瞳と髪とか…とにかく美人になった。

早くエリーと話したい

早くエリーを抱きしめたい

早くエリーとキスをしたい

俺の願いが叶う日は、そう遠くない。

番外編 とある騎士の憂鬱3 (後書き)

エリーとルークの過去編終わりですね

ルークは昔から変態だったみたいなの…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2174z/>

灰色少女

2011年12月10日11時48分発行